

「有限」時代の都市空間 ——「持続」と「再生」の境界線

野原 卓

コロンブスの新大陸発見から500年以上経過し、火星への移住も時間がかかりそうな現在、地球上には、まったくの未知の地が少なくなってきた。世界には限りがあることが分かってきた。「無限」から「有限」へのパラダイムシフトは、ローマクラブの『成長の限界』などで以前から叫ばれていたが、ようやく現実の問題として姿を現し始めている。

本書で私は、「第2章 ブラウンフィールドの再生」と「第3章 記憶の継承」という章を担当した。これらは、いずれも、「有限」時代のトピックである。「無限」時代であれば、ブラウンフィールド(BF)が存在しても、同時に良好な都市環境もほかの場所に生産してゆけばよい。歴史も、旧市街地と新市街地のように並存させてゆけばよい。しかし、土地・人・金が限られたものだと考えたとき、価値の「質量」を維持し続けることはできるのか。

また、持続再生とは、「すべて」の土地が「無限」に続くことを意味するのか。どの土地にも必ずあるはずの歴史をすべて継承するのか。すべての土地や空間を再生すべきなのか。どこかがコンパクト化されるとどこかは消えゆくのか。つまり、再生にも「限り」や「密度」があるということなのかもしれない。もっと広い目で見れば、あるまじまりが全体として持続するためには、再生する箇所もあれば、削除すべき箇所や取り替える箇所も必要なのかもしれない。野球でも、ホームランがあれば、犠牲バントもあるように、部分での評価だけでなく、体系としての評価をすることも持続再生の鍵となる。こうした疑問も踏まえつつ、都市空間の持

続再生について考えてみる。

1. 都心のツボからの「波及」を仕掛ける

恵比寿(第2章016)のように都心に取り残されたBF再生事例はいずれも、先に工場が立地し、後から都市化の波に飲み込まれた「孤島」だったのだが、だからこそ、都心に数少ない貴重な「ツボ」空間となり得た。つまり、都市全体の中でサイトのコンポジションが決定的であり、何をやってもうまくいく場所であったのだ。しかし、都市化の海と同化した後、ツボがツボでなくなりそうとき、真価が問われる。ツボとしての工場跡地が、その内部に人を惹きつける拠点としてだけではなく、周辺に波及効果を与え、活力ある地域のための「ツボ」であり続ける作戦が必要である。開発が一段落したいまでも、通りに影響を与え続ける仕掛けを持つ代官山(第1章012)、ツボ空間と市街地とを空間的に結びつけながら、形態的には明確な建築的アイコンを生み出しているビルバオ(第2章017)、エリア全体の価値を高めるために問題となる部分を取り除いて多孔質化するバルセロナ(第3章033)などはその1例かもしれない。

2. 「価値の隠蔽」を取り除く

欧米のBF再生では、地価にBFリスクが乗っているた

め、BFを除いた潜在的ポテンシャルがあれば、開発可能であり、地価が土壤浄化費用に置き換わっているにすぎない。わが国のBF再生のネックはここにある。つまり、土壤汚染(の可能性)があっても、意外と地価が高いのだ。これは、価値が隠蔽されていることにほかならない。何気なく工場跡地を住宅開発した後に土壤汚染が見つかる大問題となるのだが、もともと土壤が汚染されているというリスクの下に計画されていれば、長期的な価値は維持されるかもしれない。つまり、適正な評価をもとに、その評価に応じた再生手法を用いることが重要である。

技術的には、多様な土壤浄化手法があり、金銭に換算してペイすれば解決可能な問題となりつつある。実際に都心の工場跡地は、ほとんどが、住民の目に見えないところで処理・解決されてしまっている。問題は、再生の必要があるのに、経済ベースに乗らない土地である。ここでは、リスク・状況に応じた解決方法のオプションが必要となる。汚染を封じ込める一方で、微生物浄化などにより、上部を都市的に利用しながら、ゆっくりと改善する手法や、あるいは、一面花畑など、植物浄化による改善で「ホワイト」に戻してから使用するなど、長期的スパンで考える改善手法も考えられる。都心部でもない打ち捨てられた土地においては、有効ではなからうか。

3. 産業と生活との「隙間」に介入する

BFを再生しても、ほかの場所にBFが生まれるのだろうか。都市計画は、近代的住環境獲得のために、生産空間を都市の外側に引き離れた。目を離していると、気がつけば、そこにはBFと呼ばれる都市問題が生まれていた。ここでは、生業と住まいが完全に分離されている。誰かがどこかで何かを生産し、離れた場所ではかの誰かが消費しているのが現代都市だが、本来、消費空間は生産空間なし

では成立し得ないはずであるにもかかわらず、その関係が見えにくくなっている。そもそも、この生産空間でも誰かが勤務空間として、時間を過ごしていることには何ら変わりなく、環境性能も必要とするのである。

わが国の大規模工業地帯は、産業構造の変革期を経ながらも、その多くはまだ生きている工業地帯である。とはいえ、海運から陸運へと移行した結果、運河や護岸は表から裏へと変わり、使われていないままである。その一方で、この空間は水辺という魅力に加えて、低・未利用の産業施設の宝庫でもある。公共交通や新たなネットワークを用いた、この隙間を利用した新しい機能の挿入は、産業の履歴を消し去る土地利用転換ではない、かつ、産業空間を邪魔しない、新たな産業と生活の接点による関係構築を可能とする。うまくすれば、ものづくり産業の力を都市の活力として引き込むこともできる。言い方を変えれば、ブラウン/グリーンという境界を和らげる方法論でもある。

4. 時間・空間の構造を継承し、「物語」の糸を埋め込む

近年登録された世界遺産は、そこへ行ってどこが世界遺産なのか分かりにくいものが多い。しかし、このことを逆説的に捉えてみると、目に見える空間の価値だけでなく、その背後にあるシステム・構造やストーリーの価値が重要視されていることが分かる。

長崎県雲仙市の伝統的建造物群保存地区で、武家屋敷が残る神代小路というまちでは、川の水を各家に池として取り込み、生活で利用してまた次の家まで水路で流すという水系システムが組まれていた。つまり、水を中心にコミュニティが結合されているのである。このような目に見える空間の背後にある空間性を含めた「構造」を継承する必要がある。川越(第3章028)の「F-Gallery」のように、歴史的

空間をそのまま用いるのではなく、構造を継承しながら、現代の空間として再編を試みる考え方も重要である。

また、誰が見ても残すべきランドマークとは言えないけれど、同じような空間を持つ、いわゆる1.5級ともいうべき都市の資源こそ、活かすことが大事である。ノードとなり得るような1級の文化財や建築物も大事であるが、1級とは、1級品「のみ」がそこに存在していても成立しない。

1級の周りに多く眠る、図でも地でもない「1.5級」の存在が、図である1級の意味をさらに大きなものにするのである。

5. 「ルーツ」への選択肢を増やす

芥川龍之介の小説『藪の中』では、1つの事件において複数の証言者が異なる証言をすることで、まさに真相が藪の中に陥る物語が綴られており、いまでも犯人探しが読者の楽しみとして語り継がれている。この小説は、ほとんどがこの証言のみで構成されており、つまりは、客観的な事実を伝える記述は存在しない。

都市空間における歴史もこのことに近いかもしれない。その場に出くわしていない現在の私には、どんな事実も伝聞であり、本当に東京駅が3階建てだったかは、完全には分からない。しかし、都市における歴史の重要性は、歴史がただそこにあることではなく、現在の自分とそこにあるものとの関係性にあるのではないだろうか。だからこそ、多様な解釈が可能な包容力のある歴史的空間のほうが、さまざまな人たちの関係性を豊富に構築することができるという意味で重要となる。つまり、歴史とは、現在の自分のルーツを辿る謎解きの旅路であるとも考えられるわけであるが、自分のルーツは1つではないだろうし、謎解きは複雑なほうが面白い。多様なルーツへの旅路の選択肢を増やすことが豊かな文化を育成することにつながると言えよう。

現代の一体的な再開発も、過去になれば、それはそれ

で歴史遺産にもなり得るが、そのとき、「謎解き」の少ない空間になるのではないだろうか。歴史空間の中にある、いまの自分を知る上での幅広い選択肢、深い仕掛けが魅力を生む。たとえば、川越であれば蔵の町並みの奥には、もっと昔からある寺町と寺社があり、蔵以降にも富によってつくられる洋風建築や現代の商店街であるモールへと続く道が、ルーツへの選択肢を広げている。

6. 「跡」から考える

では、かつてそこにあったものの、いまでは存在しない歴史をどう受け継ぐか。現在では、「復元」か「〇〇跡」といった立札の掲示のいずれかしか戦略がない。しかし、たとえ、モノ自体がなくとも、「想起」させることはできる。ポルトガルの事例(第3章031)は、復元しなくても、歴史をリファレンスしながら新たなデザインを付加することで、「そこに何かがあった」ことを空間として伝えている。トレンチのデザインを空間構成に用いた「青森県立美術館」なども、縄文遺跡の存在をデザインとして伝えている意味で思慮深い。

世界遺産を目指す平泉のまちには、かつて繁栄した中世の浄土寺院そのものはあまり残っていない。しかし、旧毛越寺には、浄土を示す地形、池、緑の総合体が残るその浄土を示しており、無量光院跡では、池も田んぼに置き変わっているが、その本質は変わらないのである。これは、復元よりも強く持続し受け継ぐ再生ではなからうか。

7. デザインの「密度」が歴史をつくる

町並み保全が叫ばれてから30年が過ぎ、歴史的な資産を生かしたまちづくりは、ある程度の成熟を見せている。しかし、現代の新たな都市空間が、将来歴史的な資産になり得ると言えるような魅力を持って受け継がれる気がし

ないのはなぜだろうか。現在では魅力ある歴史的空間も、かつては最先端であったはずである。江戸期と近代空間は、いまでこそどちらも歴史として同一に扱われることがあるが、当時は異物の混入であったはずである。それでもこれらの空間がいずれも重要視されるのは、現代から見ても魅力的なデザイン密度・思考の重厚性を読み取ることができるからであろう。現在の視点で見ても長期的に残ると言えるような新しい都市空間の創出が必要となる。そのためには、生活・文化の広がりの中で捉えた都市空間・建築、あるいは、一見余計に見えても、表層や流行ではなく、本質的で純粋な情熱の下に高いデザインの密度を実現することが重要だ。

評価は、その時代でなされるものであり、未来の評価は、現在の私たちには想像できない、しかし、受け継ぐべきか議論を巻き起こすことができるような、本当の強さを私たちは受け継ぐべきなのであろう。

「再生」という視点は、ある時点（現在）で下される、「点」の評価である。そこには、再生すべきか否かの「臨界点」のようなものがあり、臨界点を上回っていけば、持続しているとみなされ、臨界点を下回ると再生すべきとみなされる。しかし、この再生の評価にも時間軸が必要ではなかろうか。いまは評価されなくとも、50年経過すると意味を持つもの、あるいは、いまはよくても20年経つと一気に評価が下がるものもある。評価する側にも過去と将来の時間を行き来する「タイムトリップ」という想像力の獲得が急務である。